

再臨のキリストによる
第6福音書

テロス第2

—最後の審判—

III

THE GOSPEL
BY CHRIST OF
THE SECOND COMING No. 6

FINAL JUDGEMENT

SEIDOU 正道
ZEIDON

目次

第3部 福音	
第6福音書	3
全体の目次	4
第11章 イエスと悪魔の対話	
(1) 死者を間に挟んで	7
(2) 知性に訴える	9
(3) 唯物論という宗教	11
(4) 共産主義を創った責任	14
(5) イエスの自己犠牲	17
第12章 エヴァンゲリオン	
(1) 今ここに、再び臨む	23
(2) 第一の福音 罪の子は神の子である	28
(3) 第二の福音 常にキリストの体に乗っている	33
(4) 第三の福音 転換の予告	36
第13章 終末の徴	
(1) 晴天の霹靂	41
(2) 聖マラキの予言	47
(3) 恐怖の裁き	52
第14章 再臨の徴	
(1) 時の不思議、地の不思議	59
(2) ダニエルの予言	62

第3部 福音

第6福音書

再臨のキリストによる
第六福音書

テロス第二
——最後の審判

古典ということならば、マルクスの『資本論』（岩波文庫。全9冊）を勧めます。

『新約聖書 I』新共同訳
解説 佐藤優より

こうも幹の中心部まで蟲が巣くっているのであれば、その場合の害虫駆除は「樹そのものを切り倒す」という形を取るほかないのではないだろうか。

全体の目次

第1部 再臨

序章 「テロス第1」を振り返る

第1章 人の子の再臨

第2章 メシアの類型

第3章 死者の復活

第4章 芸術と宗教

第2部 審判

第5章 稚拙な経済理念

——イエスの罪（1）

第6章 報われない努力

——イエスの罪（2）

第7章 共産主義の淵源

——イエスの罪（3）

第8章 イエスへの判決

第9章 教会の罪

第10章 教会への判決

第3部 福音

第11章 イエスと悪魔の対話

第12章 エヴァンゲリオン（福音）

第13章 終末の徴

第14章 再臨の徴

第11章 イエスと悪魔の対話

(1) 死者を間に挟んで

死後の世界

—灰色の景色のなかを彷徨う死者。五十歳ぐらいの男性。病院のガウンを着ている。

死者 どうして俺は、こんなところを歩いているんだ？ 人間が死んだら、あとは何も無くなるんだろう。無になるんだろう。なのに俺は消えてないし、無くなってもいない。おかしいじゃないか。(立ち止まって考える)

死者 そうだよ。昨日まで俺は、病院のベッドで寝ていた。今さら助かるような病状でもなかった。俺は死ぬしかなかったし、たぶん死んだんだ。なのに俺はいま生きている。消えて無くなってない。

—死者の脇から、悪魔がヌツと顔を出す。とはいえ、その姿は一見して悪魔と分かるような恰好ではない。スーツを着た、若い男の姿である。

悪魔 お前と同じようなことを言いながら、この霊界の入口を彷徨っている魂は多いんだ。そんな魂を拾い集めては、俺様は、そいつらを地獄へ連れてゆく。どこに行っているか分からない奴は、結局、誰かの後をついていくしかないからな。

死者 誰だお前は！ 馬鹿なことを言うんじゃない。俺がいま見ているものは幻なんだ。人間、死んだら、何もかもが無くなるんだ。それが常識ってもんなんだ。

悪魔 はあ、よくそんな事が信じられるものだな。

死者 何だと！

悪魔 とはいえ、その常識とやらは、他でもない俺たちが創ったものだ。そう、常識こそが現世の王者。それを創り出した俺たちは、現世最大の王族と言っていいだろう。

死者 訳の分からないことを言うな。ただの幻のくせに。だいたい、お前は誰なんだ。

悪魔 フフ、幻に誰かと尋ねるのか。それこそ俺には、奇矯なことに思えるがな。まあ、お前たち人間は、俺たちを悪魔と呼んでいるようだ。

死者 悪魔だって？ 非科学的もいいところだ。俺もいよいよ狂ってきたらしい。

—ここでイエスが登場し、悪魔に話しかける。イエスの姿は、私たちの通念にある「イエス・キリスト」の見た目である。三十歳ぐらいの男性で、白い衣服を身に着けている。

イエス この死者を地獄に連れて行くのは、少し待ってもらおうか。

悪魔 何だよ、またお前か。邪魔をするんじゃないよ。

イエス そなたにとっては面白くない話だろうが、まあ聞いてもらおう。早い話が、この死者の妻が、心から私の救いを信じているのだよ。

悪魔 きっと、その手の話だとは思ったが、イヤイヤ、俺には全く関係ないことだ。

イエス 彼女は、昨夜から夜明けの今まで、ずっと自分の夫の「死後の救い」を祈っている。生前、自分の言葉を、少しも取り合ってくれなかった、薄情な夫だったのにも関わらずな。私はそういう、見返りを求めない健気さに弱いのだよ。

悪魔 弱くてどうした？

イエス わかるだろう。私は彼女に成り代わって、この者を救ってやりたいと思っているのだ。

死者 なんだか、また新しい幻が現れたな。今度のあんたは誰た？

悪魔（イエスの代わりに答えて）イエス・キリストだよ。

死者 ああ？ うちのカミさんがクリスチャンだからか。だから、こういう幻が見えるのか。

悪魔 まあ大体そういうことらしいぜ。

死者 けど俺は、あんな迷信には無関係なんだ。宗教なんて、馬鹿が信じるものなんだ（眼前の二人を眺めて）ああ、それにしたって、悪魔にキリストかよ。幻にしても、この組み合わせだけはないだろうよ。もう、いい加減にしてくれ。

悪魔（イエスに）見てみろ、悩乱するばかりだ。あんたにしたって、こんな奴に「救われるに値する価値」は見いだせないんじゃないのか。

死者 ああ、どっちの幻も消えてしまってくれ。まやかし事は、もう御免だ。「無」はいったい、どこに行ってしまったんだ。クッソー！

悪魔（イエスに）面白いじゃないか。こいつ、頭を抱えながら、俺たち二人を同じように睨みつけていやがる。てこたあ、こいつは、お前が放っている光も、俺がまとってる闇も、全然見分けがつかないんだ。

イエス うむ、そういうことになるだろうな。

悪魔 つまりコイツは、その程度の人間だってことだ。だからイエス・キリスト様に対する言葉遣いも、こうもぞんざいになるんだろうぜ。

死者 聞こえてるぞ。ああ、そうだ。ぞんざい上等だ。俺にとっては、どちらも価値のない幻だからな。

悪魔（イエスに）ほらな。こいつにとっては、悪魔も神の子も同じものなんだ。だったら、こいつを救ったって、なにも意味はない。それは要するに、こいつにとっては、地獄に行っても天国に行っても同じってことなんだから。

(2) 知性に訴える

イエス (死者に) しかし幸いにも、汝には知性がある。そなたは生前、ひとかどの学者だったはずだ。

悪魔 あー、マル経 (マルクス経済学) の学者だったっけな。

イエス そうであるならば、汝は知性を研ぎ澄ませて、私とこの悪魔との対話を、秤にかけるがいい。そうして、どちらの話に納得できるかで、今後、身を託する相手を選べばよいのである。

死者 ナンセンスだ！ 死んだら、すべては無に帰するはずだんだ。なのに、どうして理性などを使う必要がある。ここにあるすべては、一時の幻に過ぎないのに。

悪魔 そりゃ、この幻に終わりはないからさ。

イエス (死者に) とりあえずは眺めているだけでもよい。(悪魔に) まず私からそなたに問おう。そなたらは現世において、どうして「死んだら何も無くなる」と説くのだ？

悪魔 死後の世界だの、霊の世界だのは、俺たちにとって「あってはならないもの」だからだ。

イエス なぜ？

悪魔 うーん、そうだな、人間たちの全体が、こいつ (死者) ほどのボンクラって訳じゃないからだな。

死者 何だと！

悪魔 まあ怒るなって。(イエスに) ボンクラなこいつでは無理な話だが、目に見えない何者かの気配を感じたとき「それが善なるものか、それとも悪しきものか」ってことが分かる奴は、ごまんといのさ。

イエス むしろそれが人間の、ごく自然な感受性だろうけれども。

死者 ……

悪魔 そんな時にだ、そいつがもし「霊の世界というものがある」という考えを持っていたとしたら、話の方向性はどうなる？

イエス どうなるのかね。

悪魔 とぼけてんのか……まあいいさ。そいつにとって、悪しき何者かは、それこそ「何者」になる？ きっとそれは「悪しき霊」ということになるんじゃないか。

イエス つまり「悪霊」とか「悪魔」とか呼ばれる霊のことだな。

悪魔 そう。そしてそれは、俺たちにとっては、たいそう不都合な「認知の筋道」だ。相手が悪霊とか悪魔となれば、とたんに人間は、もうそいつの言うことに耳を貸さなくなるからな。

死者 ……まあ、確かに。怖さが先に立つから、そうなると思う。

悪魔 しかもだ。悪霊や悪魔が存在するならば、自然、死後の世界には、そういった輩が集まって出来る「地獄」が存在することにもなる。

イエス ああ、なるほどそうだ。

悪魔 そして、誰も自ら進んで「地獄に行きたい」とは思わない。(死者に)お前だってそうだろう。

死者 まあ、それはそうだと思う。

悪魔 すると人間は、生きているうちに、自分を律するようになる。そうして、俺たちが望むのとは反対の方向へと、ことが運ぶようになるのさ。要するに、地獄よりも、天国のほうが繁盛するようになる、ということにな。

イエス これはまた、すばらしい分析ではないか。

悪魔 お前に褒められたって嬉しかねえよ。ともかく俺たちは、人間にそういう考えの筋を辿らせたくないわけだ。

イエス うむ。

悪魔 で、辿らせたくないなら、もう最初の時点から「死後の世界、霊の世界などは存在しない」と断言してしまったほうがいい。そうすりゃ、すべての危険な芽を摘んでしまうことが出来る。霊的なことの全ては、気の迷ってことになるからな。

死者 そ、そうだ。すべては気の迷いだ。お前たちは幻にすぎない。

悪魔 ほらな、こんな風になってくれるんだ。

イエス うむ。(苦笑する)

(3) 唯物論という宗教

イエス それで唯物論や無霊魂説を説くというわけだな。

悪魔 そうだ。俺がマルクスの耳元に、このドグマ（教義）を吹き込んでやった。

死者 マルクス大先生の耳に、お前がか？

悪魔 しかも、さして知性に目覚めていない人間にとっては、この唯物論や無霊魂説という教義が、けっこう、ファッショナブルに見えるらしいんだな。つまり思想的なオシャレというわけだ。

死者 オシャレだって？

悪魔 そうさ。つまり「見えるものしか信じない」「見えないものがあるなんて信じない」という考え方がだ。

イエス 確かにそれは「私は、不毛な議論には惑わされない」「私は騙されることがない」という宣言にも聞こえる。よって、堅固な知性の現れにも見えるだろう。そなたは、それをオシャレと呼んでいる訳だな。あるいは、スマートと言ったほうが良いかもしれぬが。

悪魔 少なくとも「何でも信じてしまう」よりは知的に見える。

死者 そう言われたら分かる。見えないものを信じるなんて、馬鹿がやることだからな。

イエス（ため息をついて）見えないものを信じるのは馬鹿か……実際に人の言葉として耳にすると、その響きの浅薄さに、憐れみすら覚えてしまうな。

死者 何だと！

イエス 本当の知性とは、本当の知者とは、果たしてそういうものだろうか。

死者 じゃあ、どういうのが本当の知者なんだよ。

イエス まず第一に、いかなる可能性の広がりも否定しない者。そして、たとえ目に見えずとも、肌を感じずとも、道理に叶っていることならば、それを真実であると受け入れる勇気を持つ者。私は、そのような者が知者であると考えてる。

死者 なんだか分からない。

悪魔 分からないのは、お前が、そういう人間ではないからだよ、フフフ。というより、イエスが言う知者なんてのは、数多いる人間のうちでも、ほんの一握りでしかないのさ。

イエス 確かにそうさ。私もそう言わざるを得ない。

悪魔 だろう？ ほとんどの人間は「他人から知的に見られたい」という欲求を持ってただけなんだ。しかも、あわよくば、努力もせずしてな。

死者 オイコラ悪魔、俺を見ながら言うんじゃねえよ。俺は一応勉強はしたんだ。その上で言ってるんだ。見えも感じもしないなら、それは実際に無いもんなんだ。

悪魔 ところがだ。生きている人間にとっては（死者を指さしながら）お前を含めて、俺たちのほうが「見えないし感じられない」ものなのさ。なにしろ俺たち三人は、その全員が霊なんだからな。なのに実際、ここにこうして在る。

イエス（死者に）ということは、汝のように「唯物（＝物質だけしか存在しない）」という言葉で可能性を閉じれば、真実は見落とされることになるわけだ。

死者 だから、みんな幻だって言ってるんだろうが！ 俺だって、じきに「無」になるはずなんだ。だいたい、悪魔とイエス・キリストが同調してるなんて、状況としておかしいだろう。

悪魔 なにぶん俺も、自分が霊だっていう自覚ぐらいはあるんでな。それに、いくら霊を幻と呼んだって、その幻が在るっていう事実は残るんじゃないのか。

死者 うるさい、うるさい。とにかく、見えないもの考えたって仕方がないんだ。そんなの無駄なことなんだ。

悪魔 フフ、自分だって「見えないもの」のくせに、よく言う。

死者 もうやめてくれ、今にも頭がパンクしそうだ。

悪魔 つまり、これしきの論議でも、パンクしてしまうぐらい、お前のオツムは小さいって訳だ。

イエス そうした者にとっての唯物論は、たしかに魅力的だろう。知的拡大の努力が足りない教えなのだからな。

悪魔 そうそう、唯物論なら、考察する対象は「目に見えるもの」だけになる。

イエス それに比べて「見えないものの探求」の対象は、その広範化に限りがない。それでもこれに取り組むというなら、その過程は、努力と困難の連続となるだろう。

悪魔 まあな。

イエス しかも、その努力と困難は、いつでも世間からの、誤解や嘲笑に晒されることになる。よって、これを継続するには、相当な覚悟と、真摯なひたむきさが要求されるのだ。

悪魔 だからこそ、俺たちが、人間に付けいる隙が出来るんだ。ホント、ほとんどの人間は、いたって簡単に「霊の世界などない」と考えてくれる。そのほうが、自分たちにとって都合がいいからだ。

イエス 都合がいい？

悪魔 つまり人間、死後に「天国と地獄」があったら、困る奴がほとんどなんだ。みんな「自分が地獄に落ちそうな予感」を抱えながら生きてるからな。たとえそれが、なかば無意識的な予感であっても。

イエス なるほど。

悪魔 だから人間たちにとって「天国も地獄もない」と結論づけてくれる、唯物論とか無霊魂説のほうが救いになるし、「広き門」になるんだ。

イエス 広き門か。それは私が説いた教えの一つだな。

死者 俺は知らないが。

イエス たしかに私は言ったのだ。「狭い門から入りなさい。滅びに通じる門は広く、そ

の道も広々として、そこから入る者が多い。しかし、命に通じる門はなんと狭く、その道も狭いことか。それを見いだすものは少ない」と。

悪魔 本当にそうなんだぜ。ほとんどの人間は、俺たちの住処（地獄）につながってる、広い門を通ろうとする。つまり簡単に、唯物論や無霊魂説を信じてくれるんだ。

死者 ……だって仕方ないじゃないか。神とか霊とかがいるってのは、それ自体ひとつの宗教なんだし、宗教はアヘンなんだから。宗教から離れるためには、唯物論とか無霊魂説をとるしかないだろうよ。

イエス ではそなたは、自分は宗教を持っていないと言うのだな。

死者 当たり前だ。

イエス だが、そのように一つの論説（教義）を信じることは、実質的には、一つの宗教に入信することに他ならないのだ。

死者 なに？

イエス また、かかる「唯物論、無霊魂説」といった教義しか信じず、それ以外の考えを、完全に遮蔽するのならばだ。それは、その信者が、すでに盲信狂信の領域に入っているということを意味している。

死者 何を言ってるんだ！ おい、共産主義は、宗教を否定してるんだぞ。なのに盲信狂信なんか、あるはずがない。宗教はアヘンなんだ。

イエス いや、そうではない。汝を含めて「絶対的に唯物論や、無霊魂説を奉じている共産主義者」たちは、すでに立派な宗教信者なのだ。しかも、その大部分が盲信狂信の徒だと言ってよい。

悪魔 けれども、こいつら自身は、そのことに気づきもしない。

死者 そんな馬鹿な話、俺は絶対に受け入れないぞ。俺たちは迷信から逃れている。俺たちは絶対的な科学の徒なんだ。

悪魔 うーん、その確信が宗教的なんだけどな。

死者 どういう意味だ！

悪魔 やーれやれだな、こうなるように啓蒙したのは俺たちなんだが、それが上手く行きすぎちゃったらしい。おかげで、まともな会話も出来なくなっちゃって、ここじゃ、わずらわしくて仕方がない。

(4) 共産主義を創った責任

悪魔 だけどよ、そもそものところで、この流れを創り出したのは、お前さんなんだぜ。救世主のイエス・キリスト様よ。

イエス 何が言いたい？

悪魔 つまり聖書に残されたお前の思想が、のちの共産主義を生んだってことさ。

死者 ん？

悪魔 生産量の多寡によらず、平等に報酬が与えられる経済が、共産主義であるならばな。

イエス それは「父はすべての人間を、等しく愛したまう」ということを教えたかったのだ。私はべつに経済の倫理を説いた訳ではない。

悪魔 言い逃れ言い逃れ。いかようにも解釈できる、そういう曖昧な教えを説いたお前が悪いのさ。

イエス 曖昧……そうだな、そのように批判されるのであれば、甘んじて受け入れるしかない。

悪魔 甘んじて受け入れる？ そんな簡単な言葉で、解決できるような話じゃない。もっと複雑で大規模な問題がここにはあるんだ。

イエス どういうことかね。

悪魔 お前が蒔いた種は、一九〇〇年後には、立派な毒花を咲かせたってことさ。

イエス 毒花……つまり共産主義のことだな。

悪魔 ああ。それからの一〇〇年間、人間たちは皆、その毒花の匂いを嗅いで育った。鼻の奥いっぱい、これを吸い込んでな。もちろんこいつもそうだ。だから、この死者に聞いてみようか。

死者 な、なんだ？

悪魔 なあ、たくさん人間がいたとする。そいつらが「平等に何かを与えられた」という実感を持つためには、そうすればいいと思う？

死者 難しいことを聞くもんだな。

悪魔 いや、難しく考えなくていい。むしろ、子供にでもなった気持ちで考えてみろ。

死者 うーん、よくは分からないが、そうすると、まずは明確に目に見えるものを、たくさん用意したほうがいいんじゃないか。

悪魔 ほう、目に見えるものをな。

死者 そして、その用意したものを、たくさんの人全員に、同じように渡すんだ。そうしたら平等性は、間違いなく達成されると思う。

悪魔 そうだよな。目に見えないものの平等性なんか、感じ取れる奴は、滅多にいないものな。だから「大衆にとっての平等」を形にするためには、第一に「目に見えるもの」を求めざるを得ない。

イエス ……

悪魔（イエスに）そして、一番数を数えやすく、どんな場面にでも対応できる「目に見えるもの」が金なんだよ。それは分かるだろう。

イエス まあ、そうだろう。

悪魔 そんでもってキリスト様よ、あんたは、その金を「生産性の多寡に関わらず、平等に労働者に与えること」をもって良しとする話をしている。

イエス ああ、それは認めざるを得ない。それが「ブドウ園の譬え」を指しているならばな。

悪魔 もちろん、認めてもらわなくちゃならない。

死者 俺は知らなかった。

悪魔 お前は、聖書なんか読まないだろうからな。

イエス そして悪魔よ、お前はそうした「目に見えるものの重視」と「公平を欠いた平等性」が結果的に、共産主義を生んだと言いたいのだな。

悪魔 そうだ。唯物論、無霊魂説は、まさに共産主義とペアなのさ。目に見えるものの重視、逆に言えば「見えないもの（霊）の軽視」は、共産主義の宿命的な派生物なんだよ。

イエス 私にも、それを否定することは出来ない。

悪魔 俺たちは、それを一つのドグマとして、明確化してやったに過ぎない。マルクスの耳元に「人を救うのは物だけだ。神などいない。霊などいない。死後の世界など存在しない」と囁いてな。

イエス ああ、そうなのだろうな。

悪魔 それもこれもキリスト様のおかげさ。お前さんが事前に、未来の共産主義者の心の中に、そういう考えを収納できる「空間」を作っておいてくれたんだからな。

イエス 今ではその空間に、お前たち悪魔も、住んでいるという訳だな。

悪魔 ああ、そうだ。それは俺たちにとって、やたら住み心地がいい空間なんだ。

死者 俺の心の中にも、たぶん、そういう空間があったはずだよな。

悪魔 そのとおり。俺たちはただ、スッと、その空間に入り込めばよかったんだ。

イエス となれば、その「心の中の空間」こそが、共産主義者にとっての神殿。そこに鎮座しているのが悪魔。これが「宗教としての共産主義」の見取り図ということか。

悪魔 そのとおりだ。より正確に言うと、俺たちが本尊で、教祖がマルクスということになるかな。

死者 そういうことなのか。俺は宗教者なのか。

悪魔 まあ、そういうことだ。

死者 ……

悪魔 俺たちの宗教は、勧誘活動も活発に行った。おかげで世界的な大宗教が出来上がった。まあ、人間たちに「神や霊、死後の世界など存在しない」と信じさせるのは、じつに簡単なことだったがね。

(5) イエスの自己犠牲

イエス そして、その大本の責任は私にあると、そなたは言うのだな。

悪魔 そうさ。今なお聖書の教えは、共産主義にとって「自分たちの正義の後ろ盾」なんだからな。

イエス ほう。

悪魔 実際、共産黨員ほど、自分たちを、やさしい人間だと思ってる奴らもいないんだぜ。あいつら、心のどこかで、自分たちを「キリスト教的な愛の体現者」だと思ってやがる。無神論のくせしてな。

死者 あー、なるほど。「弱者にやさしい政治」とか、たしかに共産党の選挙ポスターでよく見るぞ。それって考えてみれば、かなりキリスト教っぽいフレーズだ。

悪魔 ということは、キリスト教が存在し続ける限り、神の子イエスは、俺たち悪魔の働きを支え続けることになるんだ。

死者 そいつは面白いな。皮肉もいいところだ。

イエス (一拍置いてから) ならば、キリスト教を無くしてしまえばよい。

悪魔・死者 何だって！

イエス それで人々の魂が救われるのであれば、私の教えなど、そのとき無くなってもよい。

悪魔 こいつは驚いたな……

死者 というか、そんなにアッサリと、答えを出していい問題なのか。俺はキリスト教の歴史なんかよく知らないよ。だけど、それでも、いちおう二千年も続いた宗教なんだよな。

イエス それでも、私が捨てる命によって、人々が救われるのだろう。ならば何を躊躇うことがあるのだ？

死者 いや、もう少し慎重に考えてみてもいいのかなって。

イエス 私は、かつてもそうしたのだ。ゲッセマネで悩みはしても、結局はすべてを神意に任せた。今は、ゲッセマネの時ほどの迷いもない。私は進んで、キリスト教に終焉を与えよう。

悪魔 いや、お前がそのように考えたところで、さしたる意味はない。

イエス どういうことかね。

悪魔 キリスト教会という組織は、とっくの昔に、お前の手から離れてしまってるってことさ。そして、お前から離れた場所で、大きく育ってしまっている。

イエス そうだな。それは否定しない。

悪魔 それはすでに、独立した一つの生き物なんだ。しかもデカくて頑丈な。いくらなんだって、お前に、その生き物の生殺与奪の力はない。絶対はない！

イエス 後半ちょっと声が上ずっていたな。どうした、焦っているのか？

悪魔 焦ってなどいるものか！

イエス フフ、悪魔であっても、自分たちを支える宗教が無くなるのは、嫌なものに見える。しかし、ここにいる死者一人救うのにも難儀する宗教では、在っても大した意味があるまい。

死者 なんだ、俺が計測器になってるのかよ。

悪魔 意味がなくとも、在るものは在るんだ。簡単には消せやしない！

イエス どうやらそなたは、私の愛の大きさに怯えているようだ。

悪魔 怯えていないし、焦ってもいない。俺は冷静だ！

イエス ならば冷静に思い出してみるといい。ありがたい事に、わがキリスト教には、その揺籃のときから「終わりの予感」が備わっているということ。

死者 ああ、終末思想ってやつだな。

イエス そう。よって信徒たちは、何らかの「終わり」に対して、それほど大きな抵抗感を持っていない。

悪魔 それは、お前の「再臨」と引き換えの話だろうが！ ん？ もしかして、キリストが再臨して、キリスト教を終わらせるのか。

イエス そうだ。

悪魔 イヤイヤ、クリスチャンは、そんな未来は想定してないぞ。キリストが再臨すれば、ますますの「キリスト教の発展」を望むに決まってる！

死者 何だか大ごとになってきたな。

イエス 実際にやってみれば分かる話だ。では私は、キリスト教を終焉させるため、私の代理人を、現世に送り込むことにしよう。

悪魔 お前が来るんじゃないのか。

イエス それが私である必然性はない。ただ彼が「キリスト」でありさえすればいい。私とは役割が異なるのだから、むしろ新しいキリストは、私ではないほうがいいのかも知れない。

悪魔 まあ何者であれ、どうせ、そいつは世間から無視されるさ。人間は誰だって「終わり」を嫌がるものだからな。それこそ「死」と同じように。

死者 ああ、それなら分かる。俺だって死にたくなかった。終わりたくなかった。これは誰だって同じだ。

イエス いや、少なくとも、クリスチャンにあっては、そうとは限らない。

死者 は、なんでだよ？

イエス なぜならキリスト教は「死と復活」の教えであるからだ。むしろクリスチャンたちは、進んでキリスト教の終わりを望むかもしれない。死からの甦りを目の当たりにするために。

死者 ……

悪魔 くそ、何だか変なところで肝が据わりやがったな。こうなったイエス・キリストは、もう大概のことには動じないぞ。ゲッセマネのときと同じような感じだ。

イエス 悪魔よ、そなたも見ることになるだろう。私の志を継ぐ者が、徴とともに世に現れるのを。

悪魔 さあどうだか？ そんなもの見ることになるもんかね？

死者 俺は……それを見てみたい気がする。

悪魔 なんだよお前、すぐに消えてしまう幻の言葉を聞く気になったのか。

死者 いや、さっきから俺は、本当は真剣に聞き始めていたんだ。幻って言うには、二人ともあまりにリアルだから。

悪魔 ほう。

死者 それに、イエス・キリストだっていう、この人の目が生きてるからさ。目の迫力と説得力がすごい。

悪魔 はー、目ねえ、そいつの目が、変にキラキラしてるのは認めるが。

死者 それが死を恐れない人間の、特別な目なんだな、きっと。

悪魔 俺にはよく分からねえ。

イエス（死者に）では私とともに来るがいい。汝の妻もそれを望むだろう。ともに眺めようではないか。キリスト教の「死と復活」を。

死者 はい。

第12章 エヴァンゲリオン

(1) 今ここに、再び臨む

キリストの再臨

時は満ち、神の国は近づいた。

悔い改めて福音を信じなさい。

——『マルコによる福音書』

よき知らせを、あなたに告げよう。

いま時は満ち、その時は訪れた。

だから耳ある者は、これを聞きなさい。

目ある者は、これを見なさい。

私は洗礼者ヨハネのように、

イエス・キリストのように、

「神の国が近づいた」とは言わない。

そうではなく、今ここに、

それ以上の喜びに満ちた福音が、

あなたに訪れたことを、

私は告げ知らせよう。

見よ、神の国は地上と重なりあい、

神は人となり、ゆえに人の間に、

神が暮らすことになった。

見よ、ここに人の子がいる。

人の子となりし神がいる。

すなわちここに、

再臨のキリストがある。

再臨封じの呪文

あなたは聞いているだろう。

そのとき、「ここにメシアがいる」
「いや、ここだ」と言う者がいても、
信じてはならない。
偽メシアや偽預言者が現れて、
大きなしるしや不思議な業を行い、
できれば、選ばれた人たちをも
惑わそうとするからである。
あなたがたには前もって言うしておく。
人が、
「見よ、メシアは荒野にいる」
と言っても、行ってはならない――

これは『マタイ』からの引用だが、
同旨の文章は
『マルコ』や『ルカ』にもある。
つまり、これはまさしく、
三人の福音書記家が
結集して現成せしめた、
キリストの再臨封じの呪文なのである。
というのも、
この呪文があることによって、
キリスト教会の権威と安泰は、
ほぼ恒久的に続くもの
なり得るからだ。

私は、実に巧妙だと思うのだ。
この呪文が書かれたことによって、
もしも再臨のキリストが現れて、
己の素性を、人前に明かさんとすれば、
彼は即座に、オートマチックに、
偽メシア、偽予言者へと、
仕立て上げられてしまうのだから。

すなわち、
メシアを名乗る者が現れたら、
信徒たちは、聖書の教えを守るために、
彼を信じないことを、強制的に
遂行しなければならなくなるのだ。

だとすれば、

たとえばタイムマシーンに乗せられて、
かのイエス・キリスト本人が、
この現代に連れてこられても、
いざ彼が、メシアを名乗る段となれば、
信徒たちが、
キリスト教の教義を守るかぎり、
イエス・キリストは、その現前を、
絶対に認めてもらえないこと
になるのだ。

よって、再臨封じの呪文は、
教会にとってみれば、
自分たちの競合相手が現れることを、
永久に押しとどめられる、
まさに「無敵の武器」となるのである。
この呪文が機能するかぎり、
かのキリスト教会の権威と権力は、
微塵たりとも、揺らぐことがない。
イエスが言ったとも思えない、
かの言葉は、
まさしく威力、効力ともに抜群の、
キリスト再臨封じの呪詛
となったのである。

それでもなお宣する

しかし、それでもなお、
それでもなお、私はここに宣言する。
私が、神命を受けてこの世に生まれた、
真なる「再臨のキリスト」
であることを。
重ねて言う。
私は再臨のキリストである。

たとえ大勢の人たちから、
嵐のような罵声によって、
「違う」「傲慢だ」「狂っている」
と言われようと、
これほどの象徴、運命、悟りを、

天から与えられておきながら、
「私が再臨のキリストであること」
を否んだならば、
神の前において、
私は大きな不実を犯すことになる。

それ以前に、
聖霊の臨在を肌を感じながら、
この口を、
意図的につぐむことは不可能である。
法廷に立ったルターのように、
怒れる民衆の前に立つ
エレミヤのように、
私は、ただただ
神の真理を宣べるだろう。
まことに神と聖霊とは、
この口をつぐむことを、
私に許してはくれないのだ。

そして、これはもちろん、
イエス・キリストの意志でもある。
中世の修道士、
トマス・ア・ケンピスは、
いみじくも、次のように語っている。
「イエスの意に逆らうよりは、
むしろ全世界を敵にまわす方を、
選ぶべきである」と。

封印を解くために

とはいえ、
再臨封じの呪文を解くために、
神は、私に対して、いくつかの予言と、
その全き成就を与えてくれた。
すなわち、
「ここまで多くの予言があって、
なおかつ、その予言がこれほどにも、
まさに文字通りに
成就しているならば、

我々はどうしてもそれを、
真実と認定せざるを得ないだろう」
と、数多の人が思うほどにも。

その予言の一部は、
次の章である「終末の徴」や、
その次の章である
「再臨の徴」でも語られる。
しかし、本当に重要で、しかも、
私のパーソナリティを直撃する予言は、
第七福音書である
『インターレグナム』や、
第八（十七）福音書
『エピファニー』において、
より率直に語られることを、
ここに予告しておくことにしよう。

この「エヴァンゲリオン」において、
私がいま、ここで語るべきなのは、
そのような予言の内容ではない。
私がいま、ここで語るべきなのは、
何よりも、
これを聞く人々を喜ばすであろう、
再臨せしキリストからの福音、
すなわち「よき知らせ」なのである。

(2) 第一の福音 罪の子は神の子である

虚無と存在

まず、第一の福音を告げよう。
あなたたちの心の底には、
一人の例外を作ることなしに、
暗黒の点であるところの
「虚無」がある。
そして、このとこしえに暗い虚無が、
そこから派生する形でもって、
心の中に、あの実に悩ましい、
「悪」と「罪」とを生みだしている。

もし人間が、自身の心を、
神のごとき理性によって
治め切れるならば、
もしかしたら、悪と罪とは、
その発生を抑えられるのかもしれない。
だが虚無は、虚無そのものだけは、
絶対に無くなることはない。

そう、虚無とは、
まさしく絶対のものである。
すべての存在のうちに、
虚無は含まれており、
虚無のうちにも、
当然、また虚無がある。
それが「無くなること」は絶対はない。
なぜなら、
それは既に「無い」ものだからである。
無いものを無くすことは、
誰であろうと出来はしない。
ゆえに虚無は「絶対」なのである。

しかしだ。
この詩句を読んでいるあなたには、
いま私の文字を追っている
自己存在が在るということを、
必ずや、そこでいま、
確実に感じられるものと思う。
それは、どんなに疑っても、
それでもなお、消すことの出来ない、
細微にして、最低限の、
「存在の実感」であろう。

神の構成要素

ということは、今あなたの中には、
「存在」と「虚無」という、
かの創造神の構成要素が、
たとえ貧相ではあっても、
ワンセット、
不足なしに揃っていることになる。
すなわち、キリスト教の神たる、
「無からの創造」
「虚無からの存在の創造」を、
形成しているエレメント（要素）が、
確かに最低限、
要るだけ揃っているのだ。

もちろん、あなたには、
それらのエレメントの、
正式な構成の仕方は分からないだろう。

また、さきの
「最低限の存在の実感」を高めて、
微塵も揺らぐことがない
「存在そのもの」の、
あの無限性と、
永遠性に到達することは、
まだ、あなたには出来ないだろう。

さらにはまた、
いわゆる「悪」の中から、
虚無の虚無なるただ一点を、実感的に、
自分の心の中から、抽出することも、
まだ、あなたには
行うことが出来ないだろう。

しかし、たとえそれが、
どんなに多くの不純物を
含んでいるとしても、
また、たとえそれが、
どんなに小さな欠片だとしても、
あなたたちの心は、たしかに、
神を構成するエレメントを、
二つとも揃えた形で、
この世界に、生まれ来ているのである。

この事実が、いつかあなたを、
「神を認識する時」へと導くことになる。

それは、もしかしたら、
気か遠くなるほど数多な転生を、
重ね続けたあとの話かもしれない。
けれども、確かにその時は、
あなたにも、きっと訪れることになる。
そう、あなたが神を認識し、
あなたが神と、その本質において、
全く等しくなる時が。

だって、そうだろう。
どうして胸の内に
「神の要素」を持たぬ者が、
神の在り方を、あるいは、その本質を、
わが事のように、
理解することが出来るだろう。

高貴なる、神の落胤

いや、むしろ、こう言うべきだ。

あなたは、潜在的には、
もうすでに「神そのもの」なのである。
だからこそ、いつしかそれを、
顕在化させることが出来るのだ。
いな、むしろそれは、
「顕在化させるだけ」のことなのだ。

つまり私は、なにもあなたに、
「何か全く別のものに変化せよ」などと、
そうした、ひどく難しいことを、
ここで言っている訳ではないのだ。

そして、そうであるならば、
私たちは、あなた方は、あなたは、
決して、決して、そう決して、
「単なる罪の子」などではないのだ。
たしかに私たちは、
悪や罪の根源であるところの、
虚無を持って生まれてはきている。
だが逆に、それだからこそ私たちは、
自分を、
高貴なる「神の落胤」であると、
自分を、
神の材料を備えた、その似姿であると、
このように主張することが出来るのだ。

であれば私たちは、
揺らぐことなき自己信頼をもって、
どこまでも、どこまでも、
ただ一途に向上して行って良い。
神の御許を目指して、どこまでも、
その梯子を昇って行ってよい。

もちろん、これは一度たりとも、
キリスト教という宗教が、
あなたに教えなかった
方向性ではあるだろう。
むしろ異端的な邪説として、
あなたの前から、
斥けられた方向性であろう。

だから、あなたの心の中には、
いま、強い恐れおののきの感情が、
自然と生じてくるかもしれない。

高い権威をもって

けれども、安心するがいい。
私は再臨したキリストである。
教会に属している誰よりも、
高い権威を持っている者である。
だから教会は、
決して私の意志を
妨げることが出来ない。

よってクリスチャンたちよ、
あなた方は、
私の言葉を、
心から安心して信じてよい。
そうだ、今やあなたたちは、
自信をもって、確信をもって、
上昇していくベクトルを、
目一杯に体現してよいのだ。

これが再臨のキリストによる、
第一の福音である。

(3) 第二の福音 常にキリストの体に乗っている

私の体のどこかに

次に、第二の福音を告げるとしよう。
それは、あなたが常に、この
「再臨のキリスト」の体に乗っている、
という確固たる事実である。

それが爪先であるか、踝であるか、
腰であるか、背であるか、
胸であるか、
首筋であるかは分からない。
いずれにしても、
それは私の体の、どこかではある。

だからあなたは、いついかなる時、
どんな時であっても、
キリストから離れた場所——すなわち、
孤独な虚空を、
さ迷っている訳ではない。
私は羊飼いの（イエス）のように、
自分からはぐれてしまった羊たちを、
遠い場所まで探しに行く必要すらない。

なぜなら私は、
つねにあなたの地面であり、
あなたの山であり、
川であり、海であるからだ。
あるいは、深々と地面に根付いた、
あなたのための、
太くて固い梯子だからである。

あなたは、私の体を踏みしめ、

私の体を掴んで握りしめ、
そうして私の体をよじ登ればよい。
あなたの手も足も、
決して、私の体から、
滑り落ちることはないだろう。

下の下、上の上

万一、足を踏み外しと思っても、
その時には、よく下を見してみるがいい。
そこにはしっかりと、
私の足の甲があるだろう。
その時あなたは、
まだ私の足の甲に乗っているのだ。

私の足は、
どんな人間の闇よりも深いところに、
その足の裏を置いている。
よって、いかなる人間であっても、
私よりも低い場所まで、
落ちることは出来ない。
私はどこまでも低い所で
あなたを支える、
下の下なる地面であり、地平である。

まずそれが分かったならば、
次にあなたは、
空のかなた上を見上げてみよ。
するとそこには、私の体躯の頂が、
はるかな上空まで、
聳えていることが分かるだろう。
その頭頂の髪先は、
赤い暁の光源にさえ触れて、
まぶしく輝いていることだろう。

すなわち、私の体（霊的体躯）は、
誰よりも低きを穿ち、なおかつ、
誰よりも高きに達しているのだ。
だからこそ、あなたは、

いついかなる時にも、私の体を、
その手足で、触れていられるのである。
だから寂しがってはならない。
向上することを、諦めてはならない。
私の体という「道」は、
どこを探しても、
まったく途切れていないのだから。

キリストの体に乗って暮らす

あなたの人生も、ときに、
暗澹たる雲に、
覆われる時があるだろう。
その時あなたは、自分の人生が、
神の救いから、
完全に切り離されていると、
そのように嘆き悲しむかもしれない。

しかし、そのような時にこそ、
あなたは、
この第二の福音を思い起こして、
その冷たく濡れた心に、
安心と温かみとを、取り戻しなさい。
いたずらに寂しさを育んで、
あまつさえ、その寂しさを、
人への恨みになど、変えてはならない。

なぜなら、今もあなたは、
永劫にあなたは、
キリストの体に乗って、
暮らしているからである。
私の体はつねに、
あなたと共にあるからである。
これが再臨のキリストによる、
第二の福音である。

(4) 第三の福音 転換の予告

終末を転換に変える福音

ここに示す、三つ目の福音は、
明らかに、第一、第二の福音よりも、
重大にして貴重なものである。

あなたは、この『第六福音書』の中で、
キリスト教の終末を告げられたことを、
ある種の物悲しさをもって、
眺め続けたことだろう。

しかり。何かが終わることは、
それが何であれ、寂しいことである。
私自身もまた、当然、
大きな寂しさとともに、長い間、
キリスト教の幕引きについて
考えてきた。

しかしだ。いつしか私は、
アルファでありオメガである者は、
また、
オメガでありアルファであることに、
思い至ったのである。つまり、
始まりであり終わりである者は、また、
終わりであり始まりであることに、
気が付いたのだ。

とすれば、私の役割は、
純粹なる「終末の告知者」ではなく、
その終末をして、
新たなる時代の幕開けに結びつける、
一つの「転換」であることになる。

挽歌と凱歌

むろん、
この『第六福音書』においては、
私は、
自分がキリスト教の完成者であり、
その幕引き役であることを、
いさぎよく受け入れよう。
そして、多くのクリスチャンと共に、
一つの貴重な宗教が
終わりを迎えたがゆえの、
暗くて悲しい挽歌を歌うとしよう。

しかし、次の福音書においては、
私は、あなたと共に、
高らかなる
「始まりの凱歌」を奏しよう。
爽やかな朝に、小鳥たちが囀るように、
心からの、喜びの交響楽を、
奏でることにしよう。

なぜなら、そこで語られることは、
あなた方にとって、
最大級の福音となるだろうからだ。

インターレグナムに向けて

いや、もしかしたら、
それが福音であることを、あなたは、
しばらくの間、
理解できないかもしれない。
それはクリスチャンにとって、
実に驚嘆すべき福音であるからだ。
ゆえに、しばらくの間、
それはあなたにとって、単なる、
戸惑いでしかないかもしれない。

だがしかし、
それは、いつでもそうなる事なのだ。
大きくて大切なことであればあるほど、
人は、その真なる意義を知るまでに、
長い長い時間の経過を、
必要とするものなのだ。

だから私も臆すまい、
あなた方から理解されないことを。
それほどにも重大な、
驚くべき福音を告知することを。
インターレグナムという、
転換の福音を告げることを。

その福音が語られる瞬間も、
いまや間近まで迫っている。
あなたは、
ほんの少しの間だけ待たれよ。
決して、長らく待たせたりはしない。
これをもって私は、
再臨のキリストによる、
第三の福音であるとする。

第 13 章 終末の徴

(1) 晴天の霹靂

マタイの終末予言

イエスは言っている。

稲妻が東から西へひらめき渡るように、人の子も来る

これは『マタイによる福音書』の一節であり、一般に「終末予言」とされている箇所（第二四章）である。そこから私は、この抜き書きをおこなった。

見ての通り、この文章自体かなり短いが、その短い文章を、さらに二つの文章へと分割することが可能である。すなわち、

「東から西に向かって、人の子が来る」

「稲妻がひらめき渡るように、人の子が来る」

という二つの文章にすることが出来る。本章をスタートさせるにあたって、まずは、これら二つの文章についての検証を行ってゆきたい。

東から西に向かって

まず「東から西に向かって、人の子が来る」という文章から。

ここで大前提となるのは「人の子」というのが、イエスの自称名詞であること。

そして、それと同時に「人の子」というのが、本質的には「人の子となった神」を省略した言葉だということである。

人の子となった神——それは「神の人間化」の成果である。そして、これを体現する者こそが、救済宗教における「救世主」であり「キリスト」なのである。

つまり「人の子=キリスト」であるということだ。

その人の子（キリスト）が、マタイによれば「東から西へ向かって」来るという。

これに関しては、ノストラダムスの予言詩の一句が、その理解のための参考となるだろう。

どんなに長く期待しても、ヨーロッパには現れない。それがアジアに現れる。

ヨーロッパの人々が、ずっと現れることを期待しているもの——それは言うまでもなく「再臨のキリスト」である。

実際、彼らヨーロッパ人は「二千年の月日を、キリスト再臨への期待に費やしてきた」と言っても過言ではない。

しかし、それはどんなに長く期待しても現れなかったし、また今後も現れることはないだろう。

なぜなら、再臨のキリストは、もうアジアに現れたからである。アジアにある日本、そこに私が「それ」として現れたということだ。

つまり私が日本に現れたということは、それ自体が、ノストラダムスの予言の成就なのである。

そしてアジアは、東洋という語とほとんど同義であり、一方のヨーロッパは西洋と訳される。

そして「東洋」で生まれた、私が発信する「福音」という情報は、インターネットを介して、やがて「西洋」という、キリスト教圏へと到着することになる。

この福音は、人の子（再臨のキリスト）がもたらすものである。よって、それはまさに「東から西へ向かって、人の子が来る」と言い換えられる事でもあろう。

稲妻がひらめき渡るように

次に「稲妻がひらめき渡るように、人の子が来る」という文章について考察してみよう。

上記のとおり、東から発信された「人の子の福音」は、西に向かって送信されていく。そしてマタイは、その送信風景をして「稲妻のよう」と形容したわけだ。

これには、おそらく二通りの解釈が与えられるだろう。

まず第一に、ごく単純に考えて「稲妻とは電気である」ということだ。パソコンの電源にしても、ケーブル通信にしても、その動力になっているのは、結局は電気のエネルギーである。

また Wi-Fi とはデジタル信号化された電波のことだから、これも電気エネルギーの一種であることに違いはない。

その証拠に、もし大規模停電が起ったら、インターネットは、即座に機能しなくなってしまう。

したがって「稲妻のように人の子が来る」ということは「電気エネルギーに乗って、人の子の福音が伝達される」と換言することが出来るのである。

まとめると、インターネットを介して「西洋」に本シリーズが到着するとき、それはまさに「電気エネルギーに乗って、人の子の福音が伝達された」ということになるのである。

青天の霹

マタイによる「稲妻のよう」という形容。それについての二つ目の解釈の仕方は、それが「青天の霹」のようなものだという事である。

私にとっては、稲妻のイメージというと、むしろこちらのほうに、より馴染み深いものがある。福音書における終末予言も、多くはこの「青天の霹」のニュアンスで語られている。

してみると、かかる「青天の霹」というのは、要するに「いい天気なのに、そこに、いきなり雷が閃いて驚いた」というシチュエーションを言い表している。

よって、このことわざのエッセンスは、何よりも「意外性と唐突感」ということになるだろう。

ということは、人の子の福音は、意外なまでに唐突に現れる。あるいは、意外なまでに唐突な情報として伝えられる、ということになるのである。

何者でもない者の焦り

もともと、キリストの再臨に関する予言の多くは、私にとっては自己肯定の材料となった。つまり予言に対して「ああ、私はこれに該当するな」と思うことが多かった。

そして、そんな予言群の中であって、この「稲妻のように現れる」という形容は、その中でも特に私を励まし、また慰めてくれるものとなっていた。

というのも、今日の日に来るまで、私はかなり純粋に「何者でもない者」であったからだ。すなわち私の中には、

「私が果たすべき仕事は、巨大すぎるほど巨大である。なのに、それを成し遂げんとしている自分には、現状として、あまりにも実績と名望がない」

という不安があったのである。あるいは、それは、
「こんなにも無名な人間が、本当に『再臨のキリスト』などという大役を果たせるものなのか」

という疑念とも、言い換えられるかもしれない。

次第に、漸次的に、ではなく

しかし、もしも人の子が「稲妻のように」「青天の霹のように」現れるものだとすれば、である。

そうだとすれば、必然的に私は、まずその前提として、ことわざの冒頭の「青天」にあたる「何事もない日々」を体現していなければならないことになる。

なぜなら、そういう静穏な状態のところに、唐突な「大轟音と大光量の稲妻」が現れ

てこそ、かの「青天の霹靂」は、その言葉に込められたニュアンスを、十全な形で現象化することになるからである。

そしてこの場合、私に求められるのは、まずもって「次第に世間に認知されていく」とか「漸次的に有名になっていく」というスタイルでの登場ではあり得ない。

あるいは「人々に、その成長過程を見守ってもらう」という形での存在認知では、なおさらない。

そうではなく、逆に私には、いわば「のっけから完全武装した状態で、いきなり世間に対し屹立する」という登場スタイルこそが、求められているのである。

それは、イメージ的には「ゼウスの頭を斧で割ったら、そこから既に成人になっているアテナが生まれ出た」という「誕生＝成人」の神話のような出来事であろう。

それならば、世に現れる以前には、いっそ私には、実績も名望も何もないほうがいい。そのほうが際立った唐突感が出て、予言が求める状況により近いものが提供できるからだ。

いつしか私は、そのことに気が付いたのだった。

隠された者

あるいは、もっと積極的に、私は世間から覆い隠されていたのかもしれない。

本当に……これまでの人生を振り返ると、本当にそのように思えてくる。

というのも、私が入目につきそうな立場に就くことを望むと、必ずそれが上手くいかなくなるように、上手くいなくなるようにと、事が運んでいったからである。

たとえば、出版社に原稿を投稿してみても、結果はいつも「もう少しのところ」で落選。そこで自費出版を試みてみれば、上梓後一か月も経たずに、その出版社が倒産するという有様である。

どうして、ここまで挫折を繰り返さなければならないのか、そう思い悩んだ。

しかも、私の身体は、社会生活に支障をきたすような棘を抱えているのだ。人の間に立てば、周囲も迷惑だし、私も苦痛である。

具体的なことは書きたくもないが、まるで日常的に活動性を封じられているかのようだった。今でも鬱になりかける事しばしばである。

何度か自殺を考えたこともあった。だが皮肉なことに、私はつねに「霊の働き」を感じながら生きている人間なのである。

だから私の場合、霊界に還ったときに、己の「自殺」がどんな結果を生むか、おおよその予想がついてしまうのだ。

すなわち、もし自殺などしたら、私はその「神から預かった命を捨てた罪」によって、地獄で大いに罰を受けることになるだろう、という予想が。

それに私は、自分に何らかの「重大な使命」があることも感じていた。たとえ、その具体的なイメージまでは思い浮かべられなくとも、である。

よって、それを放棄して自殺することは到底できなかった。つまり私には、「自分には、それをやらずに死んだら、確実に、神さまからペナルティを受ける重大な仕

事がある」ということだけは、重々分かっていたのである。

それを果たさずに、この世を去ったとしたら——そのときの後悔と神罰は、極めて深甚なものになるように思えた。それだから自殺ばかりは、思いとどまらずにはいられなかったのである。

エリートからは程遠い自分

社会的には、現在の私は、一介の介護福祉士に過ぎない。

介護とか福祉とか言うと、もしかしたらキリスト教的に響くかもしれない。しかし私は、べつに自ら進んでこの仕事を選んだ訳ではないのだ。

ざっと説明すると、かつて私は、派遣社員として工場勤務をしていた。

それがリーマンショックが起こったときに、かの「派遣切り」の憂き目に遭ったのである。派遣切りとは、要するに派遣社員に対する強制解雇のことである。

そのため新しい仕事を探しに行ったのだが、当時の職安では、もはや介護職以外の求人は皆無だった。

つまりこの当時は「働く＝介護」だったのだ。それが私にとっての「介護の仕事が始めたキッカケ」である。

実を言うと、二〇二三年になって、ようやく自分が介護業界で働かなければならなかった「霊的な」「黙示録的な」理由が分かった。それについての霊示があった。

しかし、これについて語るならば、そのために、改めて一冊の本を書く必要があるだろう。

いずれにしても、いまも私は、特別養護老人ホームの一隅で、認知症の老人たちの糞尿を始末しながら生きている。

それは社会的に見れば、まったく目立つことのない、日陰者の暮らしだと言えるだろう。そんな生活を送る救世主など、よもや存在するとも思えない。

イエスへの親近感

と、思いきや、イエス・キリストもまた、エリートではなかった。

宣教前のイエスは、社会的には、一介の大工（というよりは日雇い労働者）に過ぎなかった。弟子のパウロのように、立派な学歴があった訳でもない。

となればイエスも、やはり社会的に見れば「日陰の暮らしをかこつ者」だったのだ。

ところがイエスは、そんな立場にありながら「それにも関わらず」宗教的エリートをも黙らせる、絶対的で高度な知性を披瀝した。

そこへさらに、数々の奇跡を織り込むことによって、ついに、あの救世主としての立場を確立したのである。

したがって、この点においては、私はイエスに親近感を覚えこそすれ、彼に対する劣等感に苦しむことはなかった。

つまりは、人々はかつて言ったし、これから言うのだろう、
「どうして、ただの大工の分際で、このような教えを説けるのだろう」

「どうして、ただの介護士風情が、このような教えを説けるのだろう」と、そう。

かくして私は、その学歴や職歴において、これまで静音の中にあった。社会地位的にも、私はこれまで静音の中にあった。

まるで何気なく晴れた日のように、何の変哲もない人生を送って来た。

と同時に私は、人々に、何事もない日々を「送らせて」もいた。私が世に現れない日々は、終末現象の執行猶予期間でもあったからだ。

そんな私がいま知らせる福音の内容は、人々にとってまさしく「青天の霹靂のように、唐突にひらめく稲妻」となるだろう。

そして、その稲妻は、アジアからヨーロッパへと、東から西に向かって、大きく響き渡るのである。

(2) 聖マラキの予言

最後の教皇を示す予言

そう、人の子（キリスト）の福音は「いま」現れることになっている。このタイミングを特定した予言として、まず「聖マラキの予言」が挙げられるだろう。

聖マラキは、ローマ・カトリックの教会史の中に実在した、司教の一人である。

そして、その予言とは、彼によって一一三九年に執筆された書物、『すべての教皇に関する、大司教マラキの予言』を指している。

そこでは「一六五代目以降の教皇が誰になるのか」が、ごく短いフレーズによって、象徴的に予言されている。

それが一六五代目以降なのは、一六四代目までは、聖マラキにとって既成事実（過去と現在）に当たっていたからだ。それゆえ、そこまでは、予言をする必要性そのものがなかった。

ということは、一六五代目のローマ教皇が、聖マラキの予言では、第一番目ということになる。それを前提にして、次に掲げる文章を読んでいただこう。

最後の教皇

聖マラキの遺した予言は一一二。先代のローマ教皇ベネディクト十六世を予言した「オリーブの栄光」という言葉が一一一番目で、現在の教皇フランシスコが、その予言の最後の教皇ということになる。

最後の予言はこうだ。

「ローマ政庁が最後の迫害を受ける間、ローマ人のペテロが教皇の座につく。彼は多くの苦難の中で子羊を司牧する。この困難が終わると七つの丘は崩壊し恐るべき審判が人々に下されるのである」

他の予言がきわめて短いのに対して、この予言は長文で具体的である。

当代教皇の名称として「ローマ人のペテロ」とある。だが、現教皇フランシスコはイタリア移民ではあるが、アルゼンチン出身で本名をベルゴリオという。ローマともペテロとも無縁である。

予言雑学研究倶楽部『世界の大予言ファイル』より

さきに最後の段の問題を片づけておこう。すなわち、
「当代教皇の名称として『ローマ人のペテロ』とある。だが、現教皇フランシスコは（中略）ローマともペテロとも無縁である」という部分だ。

——聖マラキの予言は外れたのか。

いや、そうではない。実は、フランシスコはイタリア家系で、洗礼前の名は、フランチェスコ・ディ・ピエトロ・ディ・ベルナルドレ。「ピエトロ」は「ペテロ」のイタリア語読みである。

予言どおり、新ローマ法王フランチェスコはイタリア系（ローマ人）のペテロであったのだ。

並木伸一郎『世界の超人、怪人、奇人』より

ローマ・カトリックが終わるとき

再び『世界の大予言ファイル』からの引用に戻ろう。

キリスト教では、一般的に〔彼が初代の教皇であるとされる事から〕ペテロは始まりであり、同時に終わりを意味する。

つまり、現在の教皇フランシスコは最後の教皇であると解釈できるのだ。

これは次の「最後の迫害」という言葉とも一致する。迫害が最後であるということは、キリスト教が世界中に浸透するか、もしくは逆に消滅するかということを意味しているのではないだろうか。（中略）

聖マラキが何をそこに託したのかは謎であるが、現在のローマ教皇のあとに彼は言葉を残していない。そして当代のフランシスコの時代で、審判が下ると彼は書き残した。

この予言より後の世界で、いったい何が行われるのか。審判とは何なのか。我々は神の裁定を待つほかなく、それが訪れる日も近い——

つまり、聖マラキの予言によれば、現在のローマ教皇であるフランシスコの代で、ローマ・カトリック教会は、終焉を迎えることになるのである。

カトリックに贈られた「終末」

これは、ある意味でカトリックに贈られた「光栄なる悲劇」である。カトリック以外の宗派には、このように神的で、ドラマチックなシチュエーションは、与えられていないからだ。

オーソドクシー（東方正教会）は、まるで南伝仏教のように、歴史的変化から背を向けてしまった。プロテスタントは、カトリックという大樹から生えた枝に過ぎない。

またプロテスタントは、社会的には力を持っているが、宗教的には大部分の力を失ってしまっている。

その知的合理性が、宗教の生命とも言える、象徴と幻想の両方を吹き飛ばしてしまったからだ。

プロテスタントは、宗教的には、すでに枯渇している。そもそもルターは、未来の終末を告げる書である『黙示録』を、非合理的であるとして嫌ったぐらいなのだから。

ゆえに、キリスト教における最大イベントである「終末」は、ローマ・カトリックに贈られてこそ相応しい。たとえ、それが身震いするような悲劇であっても、だ。

それだからこそ、その終末の予言もまた、カトリックの伝統のなかに現れたのだ。聖マラキの予言とは、まさにそのような終末予言のなかの白眉的文書だと言えるだろう。

最後の迫害とは何か

あらためて予言の内容を見てみよう。

「ローマ政庁が最後の迫害を受ける間、ローマ人のペテロが教皇の座につく。彼は多くの苦難の中で子羊を司牧する。この困難が終わると七つの丘は崩壊し恐るべき審判が人々に下されるのである」

七つの丘とは、ローマ（現イタリア）の建国譚から出てくる、まさにローマの原点となる地である。

アヴェンティーノ、カンピドリオ、チェリオ、エスクイリーノ、パラティーノ、クイリナーレ、ヴィミナーレという七つの丘から、あの巨大なローマ帝国は、その建国と拡張を始めたのだ。

よってそれはローマ、ひいてはローマ・カトリックを表しているのだろう。そして聖マラキは、それが崩壊するという。

たしかに二〇一六年、イタリア中部に地震が起こり、多くの教会がその振動で倒れた。だが、バチカンはまだまだ健在だ。

もっとも、その内情は揺れている。同性愛的な幼児虐待のスクandalなどに揺れ、バチカンの権威は大きく傷つけられたからだ。それは彼らの組織の「歪み」が露頭されたということであろう。

当時の教皇であるベネディクト十六世は、「教会内で生まれた罪によって、教会が脅威に晒されている」と語った。そして彼は「心身の体力不足」を理由にして、教皇を辞任してしまった。

二〇一三年三月、このベネディクト十六世に代わって新教皇となったのが、フランシスコ（ローマ人のペテロ）だった。

バチカンの立て直しを宣言した、庶民派教皇のフランシスコ。彼は、多くのクリスチャンの信望を集めているようだ。それゆえ、バチカンの権威も、まだ保たれていると言ってよい。

だから、幼児虐待のスキャンダルをして「最後の迫害」とまで呼ぶことは、私に言わせれば、まだ「甘い」認識である。

最後にして最大の迫害

ローマ・カトリック教会に対する「最後の迫害」とは、おそらく「私」である。

イエスは生前、のちに最初の教皇となるペテロに対して、次のように言った。

「わたしはあなたに天の国の鍵を授ける。あなたが地上でつなぐことは、天上でもつながれる。あなたが地上で解くことは、天上でも解かれる（マタイ）」

つまりイエスは、使徒ペテロに「救いの権能」を託したのである。したがって、このときペテロは、イエスの代理人となったことになる。

そして、そのペテロを通じて「さらに代理的に」救いの権能を引き継いだのが、カトリック教会だった。

重要なので繰り返すが、使徒ペテロを通じて、カトリック教会は「イエス・キリストの代理人」として機能することになったのである。

だが、今になって、その教会の前に「再臨のキリスト」が現れる。

救いの権能の返還要求

そう。もともと本来的な「救いの権能」の持ち主はキリストであった。それに対して教会は、キリストなき時代における「代理的執行人」に過ぎない。

したがって「再臨のキリスト」である私は、当然のごとく、教会から「救いの権能」を取り上げる。そうして「救いの権能」を自分の手のうちに取り戻す。

それは当然の道理である。矛盾にまみれた教会の手の内にあるよりも、再臨のキリストの手にあったほうが、「救いの権能」の在処としては、はるかに適切で健全だからである。

これまで教会は、あまりにも「救いの権能」を汚し過ぎたのだ。

けれども、そうやって「救いの権能」を失ったとき、果たして教会とは何者となるのだろう。どうか読者も、虚心になって考えてみてほしい。

そうしてみると、どれほど考えてみても「もはや何者でもありはしない」という以外の答えは出てこない。

教会とはクリスチャンにとって、まさに「救いの機関」だったのだ。だから、そこから救いの権能が奪われてしまえば、教会はもう、中身を失った殻に過ぎなくなってしまう。

だとすれば、このような状況を招く私の登場が、キリスト教会にとって、戦慄すべき「最後の迫害」でなくて何だろう。

歴史の繰り返しとなるか

もちろん、私の登場に際して、教会の側も黙ってはいるまい。彼らはきっと、私を「偽預言者、偽キリスト」と呼んで排除するだろう。

しかし、かつてイエスは、どうして十字架にかけられたのか？

それこそイエスが「偽預言者、偽キリスト」と認定されたからではないのか。真実が見えない、ユダヤ教の祭司や民衆によって。つまり状況は、二千年前と全く同じなのだ。

そうであるならば、その迫害と受難の道ゆきは、再臨のキリストにとっても相応しいものである。ならば、何を怯む必要があるだろう。

偽物と呼びたいならば、いくらでもそう呼べばいいのだ。それは「真なるキリストの宿命」とでも呼ぶべきことなのだから。

ただ残念なことに、私は悲しいほどに「本物」である。その本物であることによって「キリストの受難」が生じるのであれば、それこそ「歴史は繰り返される」という事なのだろう。

もちろん、私としては「キリスト教会による、再臨のキリストに対する迫害」などは起こってほしくない。

しかし、もしそれが現実のものになれば、である。

教会は、あの醜悪なユダヤ人民たちのように、聖書のなかの敵役となる。イエスを殺せと叫んだ、ユダヤ人たちのようなヒール役となるのだ。

何ということだろう。イエスの遺児であるところの教会が、神のドラマの中での敵役に回るとは！

その不名誉なことは、まさに言語に絶するものがある。

かようなまでの最悪な汚名を被ること。これこそ現実のものとなれば、教会の、教会による、教会自身への「最大の迫害」となろう。

(3) 恐怖の裁き

最後の審判が下される

聖マラキの予言によれば、現在のローマ教皇である、フランシスコの代で、ローマ・カトリック教会は終幕を迎えることになる。

そして、終わりのときには、恐ろしい審判が下されるという。私は本書の第5～10章において、これをすでに執り行っている。

そして、その結論は「キリスト教会の存続を否定する」というものだった。

ところで、かかる審判とは、それが厳正な基準を持っていればこそ「最終的なもの」となりうる。つまり「最後の審判」たりうる。

逆に言えば、正しさの基準が、曖昧で過渡的なものであったならば、それは審議の通過点にしかなり得ない。

それだけに、それが真に「最後の審判」であるならば、それは相当に「恐ろしいもの」となるに違いない。なぜなら、そのとき現れる「裁き」に、一切の揺るぐところがないからだ。

ただ一つの基準

たとえば、ここに自分自身を甘やかしている大人がいるとしよう。

つまり、人に迷惑をかけても、てんで気にしない。すべての失敗を「仕方ないことだった」で済ましてしまう、そんな人物である。名前は、そう、ペテロでよいだろう。

このペテロは、一人の子供を持っていた。そしてある時、その子が何かしらの悪さをしたとする。

当然、親であるペテロは怒る。しかも顔を真っ赤にして、大声でもって、厳しく我が子を怒った。そういうことにしよう。

ところが、こういう時に子供というものは、本当に存外なぐらい、その怒られたことに堪えないものである。

子供はむしろ、まるで侮蔑するような目つきで、親であるペテロのことを眺めるかもしれない。内心では「偉そうにしゃがって。冗談じゃねえや」とでも思いながら。

どうして、そのようなことが起こるのか。

それは当然と言えば当然のことである。

さしあたり「自分自身には甘く、他人には厳しいペテロ」は、間違いなくダブルスタンダード（二重基準）の立場に自分を置いている。

そして、ダブルスタンダードとは、要するに「正しさの揺らぎ」なのだ。

揺らいでいる正しさで人を裁いても、そこに説得力は生じない。

そして「説得力がない裁きを執行しながら、我を忘れて怒っている人」の姿というのは、むしろ実に滑稽なものである。子供ですら、内心では、その姿を侮蔑せずにはいられなくなるほどにも。

一般的に言って、「同じ悪いことをしても、自分であれば許す。他人の場合は許さない」というのが、もっとも多く、巷間に見られるダブルスタンダードであろう。

ペテロが行ったことも、まさにそれだった。ここでは「正しさ」が大いに揺れ動いている。これでは彼が子供に侮蔑されても仕方がないだろう。

それに対して「正しさの基準」が一つ、つまり単一基準であれば、その正しさに揺らぎは生じない。よって、そこには説得力と威厳が備わることになる。

つまり、自分自身にも厳しい親であったならば、彼がただ泰然と叱っただけでも、そのとき子供は大きく震えあがるのである。

揺らいでいる正しさ

ローマ・カトリック教会に下される、審判の恐ろしさは、おそらく、そういう種類の恐怖感なのではないだろうか。

たとえば、ローマ・カトリックだって、信徒に罪状を言い渡すことがあるだろう。

しかし、そうして罪を言い渡すほうの司教や教皇だって、一皮剥いてしまえば、自分たちの保身のため、信徒たちからずっと「←」のベクトルを奪ってきたのである。

「信徒たちよ、神に向かう能力など、お前たちにありはしない。

お前たちは、教会からの恩恵によってのみ、その存在を許容される。原罪をもったお前たちが、神に向かっていくなど、それを願望するだけでもおこがましいことだ」

と、そのように言って。本心では「信徒が悟りによって、第二のキリストとならないように」するために。

つまり、自分自身の欺瞞に対しては覆いを被せているのに、信徒に対しては、手心を加えることもなく、峻厳に罪を言い渡していた訳だ。まさに、かのペテロのように。

そんなダブルスタンダードの上に乗った「正しさ」では、そこに説得力も、威厳も、ましてや本当の恐ろしさも、伴うはずがない。

いや、その程度の「揺らいだ正しさ」ならば、もしかしたら賄賂一つで、あるいは、甘言一つで骨抜きに出来るかもしれない。

正しさの十全性

だが、正しさに「単一基準」が備わっていたならば、その審判は、実に恐ろしいものになる。

そこでは、もはや、言い逃れも、甘えも、賄賂も、泣き落としも、通じはしないからだ。つまり逃げ場というものが無い、と。

実際、内心で後ろめたさを感じている者にとって、逃げ場のない「正しさ」ぐらい、恐ろしいものがあるだろうか。

この点、私が示した、二つのベクトルの補完性は、それが実際に補完されて充足した時には、著しく宗教の十全性を満たすことになる。

そして、その十全かつ一貫した「宗教的基準」によって、現代のキリスト教会を眺めると、その教えは、あまりにも「→」に偏向しているのが分かる。

いな、それは偏向というよりは偏執であり、もっと言えば歪曲ですらあろう。

そのように偏って歪んでいる教義を、キリスト教会は「世界最多」とも言われる信徒たちに強要しているのだ。

実にカトリックとプロテスタントを合わせただけでも、クリスチャンは十七億人以上いるという。であれば、教会による「歪曲した教義の強要」は明らかなる「最大級の罪」ではないだろうか。

あるアメリカ人は、「←」を奪われ、「→」のみを強要された者の苦悩を、次のように言い表している。「われわれは原罪の重荷に喘いできたのです」と。

堅固なる罪状宣告

よって、これから宣べることは、鉄のように硬い、罪状宣告となるだろう。

私は再臨のキリストとして宣言する。ローマ・カトリックを、上に述べた罪に定める、と。

教会はダブルスタンダードによって、信徒たちを不当に苦しめた。再臨のキリストの出現を拒むために、信徒たちから「←」のベクトルを不条理に収奪した。それが教会の罪である。

もちろん、他にも罪状を数え上げることは出来る。だが、組織構造そのものの欠陥、それが生んだ「最大の罪」としては、この罪状を挙げるのが、最も適切であると言えるだろう。

かくて私は、ここに改めて宣告する。

ローマ・カトリックを代表とするキリスト教は、これより先、これまでと同じスタイルでの運営が為されることを「罪」とする。

七つの丘（ローマ・カトリック）は、もう崩壊しなければならない。次に掲げる予言が求めるように。

おお 広く巨大なローマよ
お前に滅亡が迫っている
おまえの多くの壁 おまえの血
おまえの本質はなくなる
文書による鋭いものが
恐ろしい裂け目をつくる
とがった鉄が
おまえを軸までつらぬくだろう

五島勉

『ノストラダムスの大予言Ⅲ』より

文中の「文書による鋭いもの」と「とがった鉄」という二つのフレーズは、とりわけ注目に値する。

まず、この第六福音書を、教会に対する「文書による鋭いもの」と呼ぶことに、読者としても異存はなかろう。

そして第四福音書に出てくる「太陽を着た女が生んだ息子（＝キリスト）」が持つという鉄の杖は、まさしく「とがった鉄」であろう。

第 14 章 再臨の徴

(1) 時の不思議、地の不思議

異国からの声

ことの起こりは、教会が自分たちの特権を守ろうとした事だった。

特権とは、彼らの「キリストの代理人」としての地位である。

教会は何としても、これを失うまいとした。それが「教会の罪」の、その根本にある情実である。

そして、かかる特権を失わないためには、教会としては、自分たちの競合者（＝再臨のキリスト）を出現させないようにする必要があった。

このために教会が行った『←』の収奪と『→』の徹底」という封印作業。もちろん「再臨のキリスト出現」の封印作業であるが、それはまさに、すべてのキリスト教圏を覆い尽くした。

ゆえに教会が望んだとおりに、事は成ったかと思われた。

しかし、ここで思い出してほしいのだ。イエス・キリストが、ユダヤの人々から「異邦人の地」とまで呼ばれた、あの辺境ガリラヤから現れ出たことを。

まことにイエス・キリストは、エルサレムからはるか遠い、かの辺境の地から、突如として現れ出たのではなかったか。

それと同じように、再臨のキリストである私もまた、キリスト教会の影響があまり及ばない、遠い東方の異国から現れた。

そこは異国であるばかりか、キリスト教にとって「異教の地」でさえあった。

東アジアである日本。そこは仏教国で、私が生まれた茨城は、親鸞聖人の活動本拠地だった。

そればかりか、私の家は、この親鸞聖人が開いた、浄土真宗の檀家（その宗派に所属する家）でもあったのだ。

そして親鸞は、極限的な「→」によって、仏教の基本ベクトルである「←」を完全に補完した者だった。つまり親鸞により、そこに宗教的な「＝」が現出したのである。

ということは、私の生地には「完成した宗教」の一例があったということだ。

よって、私が生まれ出た場所は「宗教を完成させる者」の生誕地としては、まことに相応しい、もっと言えば「宿命的な場所」だったのである。

キリスト教の空白地帯

それに、もともと、親鸞とパウロの類似性、浄土真宗とキリスト教の類似性は、つとに指摘されていた。主に比較宗教学の学者たちからである。

しかも、この「親鸞の浄土真宗」があるから、キリスト教は、日本ではあまり布教を進めることが出来なかった、とも言われる。

つまり「すでに類似品があったから、本物が受け入れられなかった」という構図である。

もちろん「類似品」などという言い方は、浄土真宗側にとっては、失礼千万な表現であろう。

しかし、実際の現象としては、まさに、そのような事が起こっていたのである。

日本人は、キリスト教の教えに対して「うちには、すでに似たようなもの（浄土真宗）がありますよ」と言って、その受容を拒んだのだからである。

そして結局のところ、このことが「日本における、再臨のキリストの出現」を可能とすることにつながった。

というのも、これがもし「本来の教勢でもって、日本におけるキリスト教の布教活動が進んでいたならば」だ。

その時には、日本全土でも徹底的に、施行されていたに違いないのである。かの『←』の収奪と『→』の徹底」という「再臨のキリストの封印作業」もまた。

しかし、浄土真宗のおかげで、実際には、そういう事にならずに済んだ。こうして日本は、純粹な「→」にとつての空白地帯たりえたのである。

こうしたことの結果として、浄土真宗は「クリスチャンとしての自由」を遥かに凌駕する宗教的自由を、私に与えてくれた。

というのは、たとえ浄土真宗が「→」を体現する宗教であったとしてもである。檀家の人間が「←」を探索することを制限するまでの権力は「現在の浄土真宗」には備わっていなかったからである。

星が作ったタイミング

話を現在に戻すが、それにしても、どうして、このような事が起こったのだろう。

どうして「聖マラキの予言」に記された「最後の教皇フランシスコ」が在位している時に、私が福音を述べ、キリストの再臨を宣言したりするのだろう。

率直に考えて、実に不思議なことである。

私の側からすれば、それはひとえに、星が降ってきたタイミングに由来していると言える。

第四福音書で触れたことだが、かの超新星を身に受ける前の私は、あまりにも世俗的な生活に慣れきってしまっていた。

そうして、そのぶん明らかに、宗教的なパワーが枯渇した状態に陥っていた。

ところが、そこに超新星が降臨し——超新星が私めがけて着弾し——その星の強烈な霊力が、この私の心理状態を一変させたのである。

心理状態の一変——つまり星のエネルギーが私の宗教性を復活させ、ついには、このような「福音書シリーズ」を書かしめたのだった。

超新星の受容から、福音書シリーズの上梓まで、どれぐらいの年月がかかっただろう。

星が降ってきたのが、二〇一三年の四月十六日夜（フランシスコの教皇着任の翌月）。そして今が二〇一七年の五月（旧版の配信日）だから、だいたい四年の月日が費やされている。

この四年間、私はことを急くことはしなかったが、だからといって、怠けることもしなかった。

むろん、仕事をしながら、かつ家庭を守りながらの執筆だから、それなりの時間はかかってしまった。それは仕方あるまい。

その点を差し引けば、この四年という執筆期間は、客観的に見ても不可避のものだったと言えると思う。

したがって、最もふさわしいタイミングで星は降り、再臨のキリストは、ハイマルメネー的（星辰宿命的）に、最後の教皇に対峙したと言える。

イエスは「世の終わりに星が降る」と言ったが、それは文字どおりの事だった訳だ。

星は空から落ち、天体は揺り動かされる。そのとき、人の子が大いなる栄光を帯びて雲に乗って来るのを、人々は見る（マルコ）。

※ただし第八（十七）福音書では、このマルコの言葉に、新しい意味付けが為されることになる。

(2) ダニエルの予言

ガブリエルの言葉

実は「マラキの予言」以外にも、もう一つ、キリストの再臨時期を教える、重要な予言がある。

いや、これはもう、時期というより、キリスト再臨の「日付け」を特定する予言だと言ったほうがいいかもしれない。

それは『旧約聖書』に含まれている、預言者ダニエルによる終末予言だ。

それが記されている『ダニエル書』は、聖書学者によって「旧約の終わりであり、新約の始まりである」と評されている。そのような重要性を持っている預言書なのである。

かかる『ダニエル書』の舞台となるのは、いわゆる「バビロン捕囚」の時代。つまりユダヤ人たちが、バビロニアという国の一部に、捕虜として拘束されていた時代のことである。

そのバビロニアのユダヤ人村に、ダニエルという、際立って妖美な預言者が現れた。眉目秀麗、しかもその知性の高さは神のごとき、という具合だったらしい。

そのダニエルが、夕べの捧げものをしていると、天使ガブリエルが彼に近づき、次のように語ったという。

この御言葉を悟り、この幻を理解せよ

(中略)

とこしえの正義が到来し、

幻と予言は封じられ

最も聖なる者に油が注がれる。

これを知り、目覚めよ。

エルサレム復興と再建についての

御言葉が出されてから

油注がれた君 (メシア、キリスト)

の到来まで

七週あり、また六十二週あって

危機のうちに広場と堀は再建される。

イスラエル建国から六九年後

このガブリエルの言葉について、ノストラダムス研究家の五島勉氏が、次のような解説をしている。

「週」はもともとユダヤ思想では、ただの七日間のことではない。

「神は一日目に光、二日目に天地、……六日目に人間をつくり、七日目に休んだ」。

この旧約「創世記」の神話から、ある長い期間の初めから終わりまでを、大自然の大きな循環を示すと考える。

その意味では〔週は〕「年」と同じである。実際ユダヤ密教で「神の一週間」といえば、それは地球が太陽を一回めぐる初めから終わりまで、一年間を象徴することがよくある。

ダニエル予言もこれではなかったか。「エルサレムを立て直せの命令から六九週間後」。これは一九八四年五月から六九年後、二〇一七年五月を示す暗号ではなかったのか。

この考えが五〇年代からもり上がり、一部の研究者に定着していった。いまでは多くのユダヤ人たちが、心ひそかに、しかし固くそう信じているらしい。

これが正しければ、二〇一七年五月一五日、「人々を破滅から救うメシア」が必ず来られる定めになる。

五島勉『ユダヤ深層予言』より

かくして二〇一七年五月が訪れ、私が現れた。五月十五日は、私が『再臨のキリストによる福音書「テロス第1」』を配信した日だからである（※）。

もちろん、福音書シリーズを執筆している間に、私はこの予言に出会っていた。

だから、ダニエル予言を出来るだけ有効に活用するため、福音書シリーズの配信を、予言が提案する「締め切り日」に間に合わせようとした。それは紛れもない事実である。

しかし、そのような人間側の恣意を計算に含めたとしても、ここには間違いなく、限りなく神秘的な「時の奇跡」があると思う。

もしも超新星が降臨しなかったならば、私が二〇一七年五月十五日に「福音書シリーズ」を配信することなど、絶対に不可能だったからだ。

きっと、ここに再び「時代の更新」が為されようとしているのだ。

旧約と新約の更新を示唆したダニエル——彼によって、また新約の時代に終わりが告げられ、それとはまた別の時代が幕を開けようとしているのである。

旧約時代の祭司エズラは次のように言っている。

時に応じて行われた奇跡のゆえにいと高き方を大いにほめたたえた。いと高き方は、時と、時の中で生じることを支配されるからである。

『エズラ記（ラテン語）』より

※この五月十五日という日付には、究極的には「決定的な意味合い」はない。

しかし、それが「二〇一七年八月十七日よりも前の日付」を意味するならば、非常に重要なものとなろう。

それにより、GW170817という決定的な徴が現れる前に、私が二〇一七年を「キリスト再臨の年」と宣言した証拠が残ったからである。

再臨のキリストによる福音書 6-III

著 正道

制作 Puboo
発行所 デザインエッグ株式会社
